
「すみません」

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「すみません」

【Nコード】

N0279T

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

ダメ社員の芦野はある日致命的なミスをする。周囲は彼のクビを確信し、嘲笑する。しかしそこには意外な事実があった。

舞傘真紅染さん主催の企画【日直隊】参加作品です。

（前書き）

「日直隊」とは、普段何気なく使う言葉「日常語」（舞傘辞典より）について考え直してみようという企画です。

テーマに沿ったお話をジャンル・長さに拘わらず書いて、投稿するというものです。

上級者挑戦課題としてテーマの言葉を一切作中に出さないというものが、上級者ではないのですが挑戦してみました。
テーマの言葉、わかっていただけでしょうか。

「すみません」

芦野宏伸は典型的なダメ社員だった。芦野は今日も課長のデスクの前で、コメツキバッタのようにペコペコ頭を下げている。それはすでに日常風景の一つとして、周囲の社員たちは同情も憐憫も感じることはない。彼は何をしても失敗ばかりしているのだ。

食品包装紙の印刷を請け負っているこの会社は、都内でも中小企業に分類される。全社員百名程度で、一部上場している。そのためかろうじて芦野のクビもつながっている状態だが、それも薄皮一枚といったところだ。不況の大波に翻弄される毎日では、芦野のクビはいつ飛んでもおかしくはない。大方の社員たちは、芦野のクビが飛ぶのは時間の問題だと噂している。はつきり言うて必要ない。いや必要ないどころか、時と場合によっては害でもあるのだ。芦野に足を引っ張られて、自分の評価まで落とされてはたまらない。よって、社内で芦野に好意的な視線が向けられることはない。

「しかしロット数をどうやったら一桁間違えて発注できるんだ。小学校に入り直して、もう一回算数の勉強でもしてこい」

「すみません」

三十分以上に渡って続いていた課長のお説教も、ようやく終盤に差し掛かってきたようだ。「小学校に入り直して」というお決まりのセリフは、課長がお説教を締めくくる十八番だ。

「ふう」

芦野は自分のデスクに戻り、椅子の背もたれを軋ませる。

今日もバカなミスをしてしまった。計算が合っていたからろくに全体のチェックをしないで書類を出してしまった。

芦野は節電のために自動的に落ちてしまったパソコンの電源を入れ直し、深く長いため息をつく。

「芦野さん、お茶どうぞ」

新人社員の樋口舞だ。今年都内の女子短大を卒業したばかりの二十歳。若さと明るさが同居し、礼儀正しく仕事もできるため課の人気者だ。いわゆる社のマスコットの存在である。

「あ、すみません」

「いえ」

樋口は口元に小さなえくぼを作って目を細める。その笑顔はともかわいらしく魅力的だ。芦野は密かに樋口に憧れていた。しかし今年三十六歳になる芦野にとってみれば、高嶺の花どころの話ではない。芦野は今まで女性と付き合った経験はない。風俗でさえ、怖くて行ったことがない。遠ざかっていく樋口の小振りなお尻を眺めながら、芦野はもう一度長いため息を吐いた。

翌日の出来事は、朝の一本の電話から始まった。その電話は課長へ回され、課内の空気は一気に緊張で張りつめていく。応対する課長の表情が、見る間に険しくなっていたのだ。叩きつけるように受話器を置くと、課長の怒声が響き渡る。

「印刷所から催促が来た。『ホツとエビコロ』の原稿がまだ届いてないそうだ」

室内は静寂の次にざわめきで満たされる。『ホツとエビコロ』は大手冷凍食品メーカーの発注を受けて社が請け負っている新製品だ。小さめのエビのコロッケはお弁当のおかずで最適で、行楽シーズンに向けてかなりの売り上げが期待されている。他部署である美術部がデザインを担当し、芦野の課が校正をして印刷所へ持っていくことになっていた。印刷所では原稿を元に原版を作成し、包装紙の製造・印刷に入る。課長の話では明後日のメーカーへの納品々切には、もう印刷を始めないと間に合わないらしい。

課内は騒然となる。納期に間に合わなければメーカー側にとっては大打撃になる。一日遅れるごとに、数千万円単位での損失につながるのだ。その損失額は芦野の会社の規模では、社の存在自体が傾き

かねないのだ。

「あの、原稿つてもしかしてこれですか」

芦野だった。自分のデスクの引き出しから無造作にアクリル板を取り出す。ざわめきが驚愕に変わり、継いで深いため息に変わる。やってしまった。とうとう芦野は取り返しのつかないミスを犯してしまった。

「お前」

課長は真っ青になり絶句する。次に落ちるであろう課長の怒声を覚悟し、社員たちは首を竦める。しかし聞こえたのは慌ただしく歩き出す課長の足音だった。

「すぐに印刷所に行くぞ。芦野それ持つてついて来い」

「はい」

慌ただしく出て行った課長と芦野の足音が遠ざかると、室内の張りつめた空気は一気に弛緩する。そしてそこかしこで、おしゃべりが始まった。

「彼、もう終わりよね」

「これだけのことでかしちゃあな」

「しかしばかだよなあ、なんで気づかねえかな」

概ねおしゃべりの内容は、芦野を非難するか嘲笑するものだった。しかしたった一人、机に肘をついて俯いて肩を震わせる若い男性社員がいた。樋口だけはその社員の異変に気づき、そして意を決して声を上げた。

「あの、みなさん聞いてください」

「どうもすみませんでした」

課長と芦野は印刷所の所長の前で深々と頭を下げる。どこも最低限の人員でぎりぎりのところで遣り繰りしている。印刷所はこれから連日徹夜の作業になるのだ。しかし逆に、連日徹夜で作業すれば納期には間に合う。まさに間一髪だった。

会社への帰り道、芦野は課長の背広の背中を見ながら今までの自

分と今後の人生へ思いを馳せていた。きっと自分はクビだろう。最悪の事態は免れたが、親会社の課長を下請けの印刷所の所長へ頭を下げさせたのだ。今までの自分の評価を鑑みれば、クビ以外にこの責任を取る方法は考えられない。三十六歳の自分が無職になったらこれからどうやって生きていけばいいのだろう。このご時世、この年でも何かの資格も特殊技能も学歴もない自分が再就職などできるわけがない。こうなったら、コンビニのバイトでも肉体労働でも臓器売買だろうが何でもやるしかない。

「おい、芦野」

肝臓は一個しかないからできるだけ高く売ろう。でもでかいから切り売りできるかな。いやそんなことできるわけがない、献血してヤクルトもらって一日くらいは生き延びられるかな。ホームレスになんかなったら、公園で寝泊まりするのかな。ホームレス中年なんて、ネタどころか笑い話にもならない。

「おい、芦野」

課長の厳しい顔がドアップになって、芦野は驚いて地面に尻餅をついてしまう。

課長はポケットに手をつ込んで、仁王立ちして見下ろしている。

芦野は慌てて立ち上がり、直立不動の姿勢になった。

「俺に何か言うことはないか」

「え、あ、す、すみませんでした」

芦野は腰から上半身を九十度以上折り曲げ、深々と頭を下げる。

どうせクビになるのだからと、開き直れないのは仕様だ。

「それだけか」

「は」

芦野は顔だけを上げて課長を見上げる。赤い夕日で逆光になった課長の表情はわからない。しかし目を細めると、微かに口角を持ち上げる課長の表情が見て取れた。それは芦野の見間違いでなければ、微笑みという表情のはずだ。

「お前は本当にバカだな」

「は、え、ああ、はい」

芦野はそれ以上何も応えられず、ぽかんと口を開けるしかない。課長はそのまま背広の裾を翻して、さっさと歩き出してしまふ。芦野は何が何だかわからず、小走りで後についていった。

課に戻ると不思議なことにいつもの冷たい視線はなく、みんな気まずそうに微笑んでいる。芦野はわけがわからなかったが、とりあえずいつものように謝った。

「みなさん、ご迷惑をかけてすみませんでした」

頭を下げると、一人の若い男性社員が駆け寄ってくる。そして芦野の前で勢いよく頭を下げる。

「芦野さんすみませんでした。僕が原稿を芦野さんに預けっぱなしにしていたのが悪かったです」

「え、あ」

突然のことに芦野は言葉を失う。確かに芦野は彼に原稿を預かってくれと頼まれてはいたが、いつまでと言われたわけではない。どうやら彼は芦野に原稿を預けたまま、そのことを失念してしまっていたようだ。今回それが原因で、課長にまで迷惑をかけてしまった。彼はそのことを言い出せずに、結果として芦野に責任をなすりつける形になってしまった。どうやら課長と芦野が印刷所に行っている間に、その事実が発覚したらしい。

事情がわかった芦野は、彼の肩に手を置いて頭を上げさせる。そして静かに首を振る。

「謝るのは私の方だよ。私がきちんと君に期日を確認していればよかったんだ。君の責任じゃない、私の責任だよ」

「芦野さん」

彼は感極まった表情で目を潤ませる。芦野は別に良い格好をするつもりはなかった。彼はこれからの人材で、自分のような課のお荷物じゃない。こんなミスで彼の査定を落とす必要はない。それに比べ、自分の評価はこれ以上落ちようもない。事実原稿が出てきたの

は、芦野の机からだったのだから。

上着を椅子の背もたれに掛けていつもの格好になった課長が、芦野たちの横へ来る。そして芦野と男性社員の肩に手を置く。

「芦野は確かにミスも多いし、はつきりしないヤツだ。お前らが陰で芦野のことを何て言ってるのかも、俺はよくわかってる。でもな、芦野は謝りはしても言い訳は一言もしなかった。そしてそんな芦野のことをきちんと認めている後輩もいる」

課長は樋口を見る。芦野の無実を課の全員に訴えたのは樋口だ。彼女は芦野に今回の責任がないことをわかっていた。

「なあ、お前ら。仕事つてたいへんだよな。失敗すれば自分だけの責任じゃ収まらない。時には今回のように、会社自体が傾きかねない大きなミスもある。でもな、お互いを信頼し合って助け合って仕事すりゃあどんな困難だって乗り越えられる。俺は先輩に怒鳴られて小突かれて、そうやって仕込まれてきたよ」

「か、課長も私のように怒られていたんですか」

「ばあか、お前どころの話じゃねえよ」

課長は芦野の頭を軽く小突く。

「だからこれからも悪いところは悪いって認め合って、お互いががんばっていこうや」

「はい」

みんなで声を合わせて返事をする。それぞれのデスクに戻る際、みんな芦野へ「すみませんでした」と会釈していく。肩の力の抜けた芦野は、自分の椅子へ深く腰を下ろす。そこへ樋口がお茶を持ってきてくれた。

「はい芦野さん、お疲れ様でした」

「あ、すみません」

「もう」

樋口はチャームिंगな笑顔を作り、トレイを胸に抱く。

「他に言つべき言葉、あるんじゃないですか」

「え」

芦野はしばし呆然とし、そして気づく。

「あ、み、みんなに言ってくれたみたいで、本当にすみませんでした」

「ふう」

樋口は困ったように眉を八の字にする。そしてまた、花のように明るい笑顔を見せる。

「芦野さんには、わたしが魔法の言葉を教えてあげます。その言葉を今までの『すみません』の代わりに使ってください。きっといいこといっぱいありますよ」

「え、ま、魔法の言葉」

芦野は樋口の満面の笑顔に戸惑う。その笑顔は眩しくて、芦野は目を細めてしまう。そして樋口はゆっくりとその言葉を紡いだ。

それから芦野の「すみません」は鳴りを潜め、課長に怒鳴られる回数も比例して減ったという。ほんの少しではあったのだが。

（後書き）

「日直隊」に参加されたい方は、
←のリンクより舞傘さんの活報へ
その旨コメントくださいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0279t/>

「すみません」

2011年5月5日22時55分発行